「宣教研究」第七号 発刊に寄せて

峰田 将　（神召教会員）

私はかねてから福音宣教の働きに信徒がどのように関わるべきか考えさせられてきました。 明治以降プロテスタントの活発な働きにもかかわらず、いまだに総人口の１％に満たないクリスチャンですが、それがバラバラに活動していてはなかなか日本の魂に福音を伝えることができないのは当然かもしれません。 教会の壁を越え、場合に　よっては教団教派の壁を越えて 力を結集しなければならないのではないかと思います。 それには、世俗の世界で日々葛藤している信徒がその役割を果たすべきではないかと思って います。

今回の「宣教研究」誌では、初めて信徒も参加して編纂された極めて画期的な試みだと思います。いわば「信徒論」とでも言うべきテーマで、研究のターゲットを「信徒」にあてるだけでなく、信徒も執筆者として参加した 今回の取り組みは先ず大いに評価すべきものと考えます。

社会がます ます複雑化していく現代において、それぞれに与えられている賜物を充分に生かしていくことは実に大切なことだと信じます。

教職と信徒、それは等しく神に召された者ですが、それぞれ異なる賜物をもって神に仕える存在です。 信徒の持つ幅広い世界での知識経験が教会の業の幅を広げることになるはずです。 私は昔読んだH・クレーマーの「信徒の　神学」において 「信徒が役割を果たすのは、いわゆる教会と世界の関係という分野においてである」 と述べられて　おり、「信徒は教会の凍結財になっている」という言葉に 強い衝撃を受けたことをいまだに鮮やかに覚えています。しかし結局何もできなかった自分に深い反省と申し訳なさで自責の念でいっぱいです。 今回の発行されるこの画期的なこの資料がぜひ多くの信徒に読まれ、学んでいただく　機会を作っていただければ 幸いです

おりしも、「タラントバンク」 がスタートしたところであり 非常にすばらしいタイミングだと存じます。 信徒各自に与えられた賜物を発掘し、主の御用のためにそれを最大限に活用する場を提供していくことは 極めて大切なことだと思います。 しかし、それが個別に福音宣教に用いられるだけでなく、それをつなぎ合わせることによっ

て　より一層活動の場を広げていくことができると信じます。　まさにタラントのネットワークづくりが求められているのだと思います。　タラントバンクというと特別な能力を考えてしまいがちですが、私は特別なことが必要だとは思いません。　社会の各分野で活動している信徒同士が、日常の教会活動を手伝うという程度のところから始めればよいのだと思っています。　まず教会同士の助け合いの場を広げていくことです。　信徒同士が教会の壁を越えて協力し合うところから何かが発見されてくるのではないかと考えています。　私たちは今、与えられている賜物も異なり、この地上ではそれぞれ別々の教会に所属していますが、神の前では教会・教団の壁を越えたキリストの体なる教会の肢々なのだと思います。　それぞれの特性が十分に生かして用いられるよう積極的にご奉仕に励まなければならないと思います。　複雑を極めた現代社会においてこそ　いろいろな場面で活躍している信徒のキャリアやタラントを生かす方策を考えるべきだと信じます。　今回発刊された「宣教研究」第七号は各教会において信徒が読めるようにご配慮いただいたということですから、これを機に信徒自身が強い責任感・使命感をもって次に歩を進めることができる契機になれば幸いだと思います。